The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「閉じた公共空間」としての庭園 : アルハンブラの庭園を手がかりに
Author(s)	佐藤, 紗良
Citation	a+a 美学研究. 2023, 14, p. 162-176
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103378
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

庭園

「閉じた公共空間」としての庭園

——アルハンブラの庭園を手がかりに

佐藤紗良
Sara Satoh

本稿は、西欧諸国において、元来個人所有であった庭園が公共空間に変化する過程をその歴史と照合して分析し、遺産として今日に残ったそれらの空間構成と現代的意味を考察するものである。

中世以降のヨーロッパにおける諸侯や王室、上流階級などに所有された庭園や植物園（以下、歴史的庭園）は、権力の象徴の場として機能していたが、その多くは時代を降るにつれて一般市民に開放されるようになった。その最たるものが公園である。公園は、一九世紀半ば、都市の環境悪化に苦しむイギリスやドイツに出現し、労働者の健康促進や教育・啓蒙のために、王や貴族の所有地を整備し直して公共空間にしたものがその原点とされる[*1]。歴史的庭園について考えてみれば、ヨーロッパのおよそ大庭園と呼ばれるような庭園には、未だに入場料が課される仕組みになっているところも多いが、こうした完全なる公共空間未満のオープンスペースは、いわば「閉じた公共空間」[*2]とも言えよう。完全に開放された公園と現在も入場制限がある歴史的庭園とでは性質が異なるとは言え、いずれも一般公開という方向に舵を取り、程度の差こそあれ希望者は自由に出入りできる空間を持つ。このような庭園は公園同様、訪問者の精神的・身体的健康に資する役割を担ってきたし、植物や水といった基礎的な構成要素も重なるところが多い。また社会の変遷に合わせて両者の役割や意味付けの幅が広がるにつれ、その共通項も増えつつある。

折しも公園が登場したのと同時代、ランドスケープ観もパラダイムシフトの途上であり、ランドスケープ論の焦点が個人の庭園から公共空間のデザインへと展開していった。ランドスケープ論においては、主として公共空間やオープンスペースが扱われ、特に何者も使用を制限されないスペースにおける人々の空間受容のあり方や参加度が評価される。物理的スケール及び対象の幅を広げてきた近代以降のランドスケープ論が公共空間と相性が良いのは自明のことであるが、その一方で、公共空間を持つにもかかわらず歴史的庭園はその枠組みにはあまり入ってこない。その理由として、こうした歴史的庭園は、主に構築物を「ゼロベースで考えるモダニズム」[*3]以降のランドスケープ・アーキテクチュア[*4]においてはその対象となりにくいということが挙げられる。また、公園は主に国や自治体が管理し、一般市民の参画が主眼に置かれているため、ランドスケープ・アーキテクチュアの視点から語られることが多い反面、歴史的庭園群が分析される際には、考古学や歴史学、デザイン論などからの研究が多いことも理由の一つである。しかしながら、歴史的庭園も近年では訪問者に積極的な介入を促し、児童・学生の教育プログラムや市民参加の

イベント、生態系やサステイナビリティの重視といった構想を打ち立ててきている。それらは現代的な公園に期待されるコンセプトとも類似しており、両者の役割が接近しつつあるように感じられる。

こうした状況を受け、本稿では特にスペインのアルハンブラ宮殿の庭園に着目し、近現代的ランドスケープ・アーキテクチュアの視座から新しい公共空間のあり方にかんして考察しつつ、歴史的庭園の現代的意味について論じる。アルハンブラは複数の宮殿を含んだ城塞都市で、現在は完全に外部に開かれた空間と入場制限を持つ空間が入り混じる建築複合体である。

以下では、まず庭園の定義を庭園史から概観し、それらがいかに今日に引き継がれているかを確認する。その後、アルハンブラの庭園を例に挙げ、それらがどのようにして外部に開かれてきたのかを明らかにする。さらに近代以降のランドスケープ論で公共空間を分析する際に重視される「公私の距離」、「地と図の関係」、「市民参画」の三点から、二〇世紀に新設された都市公園とアルハンブラの庭園を比較することにより、歴史的庭園の公共空間としての可能性と現代的意味を考察する。

なお、公共空間は一般に public space とされ、私的空間（private space）と対の概念となっている。近代以降のランドスケープ論における公共空間とは、誰もが参加し利益を受ける「開かれた公的領域」、そして社会に開かれたオープンスペース[*5]のことである。本稿では希望者なら誰でも入れる空間として、入場制限がある領域をも含めることとする。

庭園の原型としての楽園

庭園は、古くから人類が追い求めていた理想郷を現世に写し取る役割を果たすものでもあり、特にユダヤ＝キリスト教文化圏の人々にとっては失われた楽園のイメージと結びついていた。ティグリス川東岸の古代都市サーマッラーで見つかった紀元前四〇〇〇年頃の鉢には既に、交差した二つの運河と、その四隅に木や鳥があしらわれた絵が描かれている[*6]。キリスト教の旧約聖書『創世記』において理想郷として登場するエデンの園には、一つの水源から流れ出る四本の川や豊かに実った木々が描写されており、写本の挿絵では、塀や塔、丘などで囲われたエデンの園がしばしば登場する。このように外界から完全に隔離された理想の空間が楽園の象徴となり、「閉ざされた庭」、ラテン語で「ホルトゥス・コンクルースス（hortus conclusus）」と呼ばれた。このイメージは旧約聖書の『雅歌』の一節から生まれ、聖母マリア信仰と結びついて純潔の象徴とされた。「閉ざされた」「封じられた」という表現がマリアの処女性を暗示するものとして解釈され、閉ざされた庭園に座るマリアのイメージが絵画などによく表されるようになったのである［図1］。

図1 ｜ ライン川上流地方の画家《楽園の庭》1410–20年、フランクフルト・アム・マイン、シュテーデル美術館
Wikimedia Commonsより

興味深いことに、こうした楽園のイメージはイスラーム世界においても類似しており、聖典のコーランにおける天国では、芳しい草木や果実が実り、清水、ぶどう酒、乳、蜂蜜の四つの川が流れているとされている。また、イスラーム圏の都市や建築の空間構成は内に向かう求心的な力が働いていることが多く、囲い込まれた空間として共通項を持つ。例えば建築物においては、外側が簡素な造りである一方で内側は華やかな装飾や空間がしつらえられることが多い。都市においては、内部の様子が部外者の目に入らぬよう、街路から家に至るまでに絶妙に角度がつけられたり視線を吸収する簡素な空間が設けられたりするが、内部では素朴な外観からは想像もつかないような心地よい語らいの場が訪問者に提供される。その、内側に凝縮された求心力の中心にあるのが中庭であり、イスラーム庭園はより楽園性が強いとも考えられる。

イスラーム庭園の代表形式の一つチャハル・バーグは、ペルシア語で「四つの庭園」という意味を持ち[*7]、主に水路や通路で十字に分けられた四分庭園である。

これは君主の特権を象徴した形式の一つとも考えられており[*8]、まさに権力者による楽園の所有を体現していた。チャハル・バーグはキリスト教の建築様式にも影響を与えたと考えられている。修道院に設置されているクロイスター（中庭の周囲を巡る柱廊）がその一例であるとされ[*9]、楽園を表す形式にも共通点があるということが見てとれる。古くから修道士たちは俗世界から隔離された修道院の、閉ざされた庭園を中心として瞑想の生活を送ってきたが、今でも静謐とした柱廊に囲まれた十字の通路と四分割された植栽を見ることができる。このように、周囲を閉ざし、美しく芳しい植栽と四分された路をイメージの源泉として、人々は天国を想起させる庭園を身近に作ろうと試みてきた。

近代以降に目を向けてみると、近代ランドスケープ・アーキテクトの第一世代であるG・エクボ（Garrett Eckbo, 1910–2000）は、個人庭園を「個人の家庭の私的利用のために十分囲まれているか遮蔽されている住宅周りの戸外空間」とする[*10]。すなわち、庭園は周囲を塀や壁で囲まれていることが前提とされており、少なくとも「囲まれた空間」という、楽園、そして庭園の定義は近代以降においても踏襲されていることが伺える。付け加えておくならば、「パラダイス（paradise）」は、古代ペルシアの「パイリダエーザ（pairidaēza、壁などで周囲を囲む）」という言葉を語源として生まれたとされており[*11]、周囲を完璧に囲まれた、美しく実り豊かで平穏な空間が、キリスト教圏やイスラーム圏で共有される庭園の原型、まさにパラダイスのイメージだったと言える。

アルハンブラ庭園の公共化

南スペイン、グラナダに位置するアルハンブラ宮殿は、ナスル朝（最後のムーア人のイスラーム王朝、一二三〇―一四九二）の人々によって一三世紀頃から建造され始めた。一四九二年以降はキリスト教の君主による支配を受けたこともあり、複数の改築や修復を経て、様々な時代様式の庭園・建築群で構成されることとなる。都市を中心に周囲には森が広がり、グラナダの街からアルハンブラにアクセスするには森を抜けて坂を登って来なければならない。また、ア

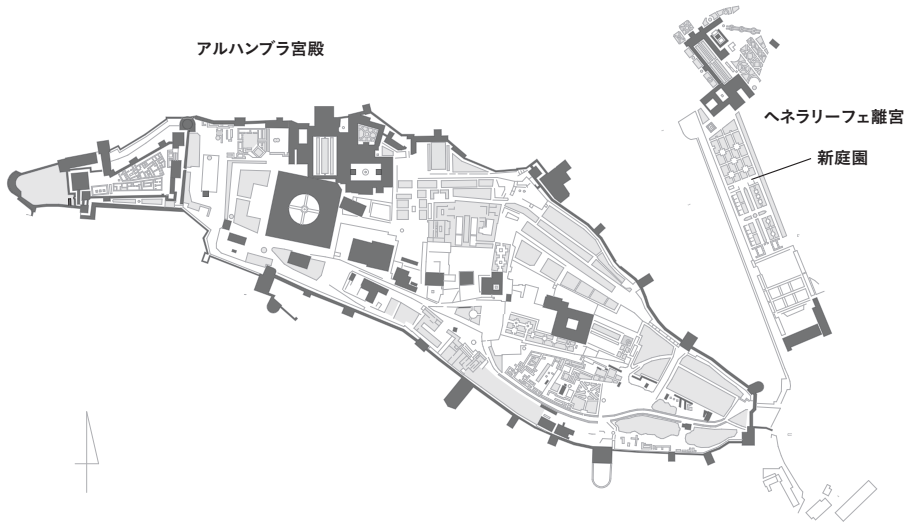

図2 ｜ アルハンブラ及びヘネラリーフェ平面図 (Jan Holert, 2021)。
名称及び庭園を示す線は筆者による。

ルハンブラから谷を隔てた太陽の丘の上に位置するのは、夏の離宮であるヘネラリーフェで、豊かな水と植物を持つ庭園群、及び簡素な建築群で構成される。庭園を主眼に置くヘネラリーフェは敷地内に野外劇場や散歩道なども建設されている。この離宮は一九二一年に国の保有物としてアルハンブラに統合され、国家的な修復・保存が開始された。ヘネラリーフェ含めアルハンブラの現存する庭園群は、主に近代、特に二〇世紀の修復後の姿ではあるが、イスラーム庭園の特質を保持するとされるものが多い。庭園は、建築内に挿入されたり物理的に閉ざされて複数連なっていたりと、まさに「閉ざされた庭」を体現している。本章ではヘネラリーフェ構内の新庭園を例に、アルハンブラの庭園が一般開放されていく過程を考察する［図2］。新庭園は二〇世紀に造営され、歴史的庭園と建築の複合体であるアルハンブラの中でも極めて近代的な空間の一つである。歴史的庭園が元来持つ私的性格の中に現代の公共的性格が挿入されているため、公共空間としてアルハンブラを捉える際の重要な要素となると考えられる。

新庭園はアルハンブラとヘネラリーフェを結ぶ道の一つで、かつ離宮の玄関口となる［図3］。二〇世紀に、段々畑の果樹園だった空間に造園され、イトスギの迷路や噴水、十字の池、バラ園、小石を敷き詰めた通路などにより華やかな様相を呈する。庭園構成はテラス式となっており眼下の風景に向かって開かれているものの、背の高いイトスギが壁を形成しているため迷路内は

周囲が囲われた空間として意識される。この庭園は一九三一年から造園を開始した第一区画と一九五一年の第二区画の二段階に分かれており、立案・作業責任者も異なる。特に第二区画は、四分された水路、周囲のイトスギの壁、水、植物などのエレメントが、楽園、そしてコーランの天国を想起させる構成となっている。この空間は、国際音楽ダンスフェスティバルに使用する野外劇場創設、及びそれに伴い第一区画の古い庭園空間を隔離・保持する区域として造園された[12]。第二区画の作業責任者である修復建築家フランシスコ・プリエト＝モレーノ（Francisco Prieto-Moreno, 1907–1985）は、「今や大勢の観光客に開放されているので、古い庭園に価値ある拡張を提供することが必要だった」[13]と述べ、観光を主眼に置いたオープンスペースを作ったことを明示している。すなわち訪問客の目的の変化によって、修復家が歴史的庭園を含んだランドスケープを改変したのである。こうしてヘネラリーフェの敷地は、本来の農耕の用途を失って庭園やサービスエリアになっていった[14]。ここから、ヘネラリーフェのオープンスペースは観光という枠組みのために大きくその形が修正されたということが分かる。観光客のためにコースが設定され、アルハンブラとヘネラリーフェをつなぐ石橋も新たに建造された[15]。これはアルハンブラの他区画でも同様で、美化や修復という名目のもと、庭園が新たに造園されるなどの作業が行われた。現在新庭園は物理的にイトスギの壁に囲まれていると同時に、入場料などの制約も課されており、ハード面とソフト面とで二重に閉ざされた庭園となっている。

このように、アルハンブラの庭園群は本来閉じた空間であるものの、庭園の存在意義の変化や時代の要請に合わせ、オープンスペースの修正によってその性質を再構成させてきた。その他にも、王宮の管理が杜撰だった一九世紀前半、過去には使者を出迎えていたはずの王宮内部の庭園の池が市民の洗濯場と化す[16]など、本来の用途と異なって開放されていた時期があったが、一九八四年にユネスコの世界遺産に登録された後は大きな変更はなくなり、一時期完全に開放されていた部分も、現在は建造物の保存というコンセプトのもと、制限付きの開放となっている。

また、アルハンブラは元々が王宮都市であったため、都市ならではの公共空間も多分に含む。当時の公衆浴場や教会は今日においても誰もが自由に入場でき、市民と観光客とで賑わう。街から王宮に至るまでの広場や泉では市民が散歩や休憩をしている光景が見受けられる。こうした、人が集うことを本来の目的とした施設が開放されることにより、全体として閉ざされつつも開かれた空間が志向されている。

図3 ｜ 新庭園。筆者撮影（2020年2月）。

欧米諸国における公園の成立

本章では、ランドスケープ・アーキテクチュアの視座からアルハンブラの庭園を分析するにあたり、欧米諸国における公園の成立とその特徴を「公私の距離」、「地と図の関係」、「市民参画」の三点から整理する。前述したように公共空間は社会に開かれたオープンスペースのことである。歴史的庭園の現在の姿を概観してみれば、その多くが王侯貴族の宮廷庭園から、限られたエリート市民層に開かれた公共庭園（public garden）という過程を経て、不特定多数に開かれた公園（public park）へと移行している。このように私的空間の開放とともにランドスケープ・アーキテクチュアは近代的な公共性を獲得してきた[17]。

近代ランドスケープの発生はこうした公共空間の登場がキーファクターとなっており、その始まりから「公」と「私」の対立を孕んでいた[18]。しかし二〇世紀後半に私企業が主体となって公的領域を開発していったことで、私的建築物に公共性を帯びた空間が内包され始め、ランドスケープ・アーキテクチュアにおける公私の二極化の流れを止めることとなる[19]。その後徐々に公私両方の性質を併せ持つ空間が登場する。例えばニューヨークに見られるポケットパークは、公共空間を個人の私的利用に供する狙いがある。中でもその先駆けとなった一九六七年のペイリーパークは、高層ビルの隙間、かつ歩行者道路に面する奥まったスペースにあるにもかかわらず、可動式の椅子や木漏れ日、水の使用などによって通行人がふらりと立ち入りやすい空間となっている。このポケットパークはあくまで庭園のような様相を呈し、公共性は高いが個人の空間も維持している[20]。例えば三方向を壁で囲み、陽光、水、樹木という、人々が庭園に求める要素が整えられていたり、左右の壁をバーティカルガーデンとし、枝葉の天蓋を現出させることによって、この小空間を、足を踏み入れにくい密閉空間から安らぎのスペースへと変貌させている。訪問客は昼食をとったり読書をしたり会話に興じたりと、互いに距離を取りつつ各々の活動をする。ここでは人々による能動的な活動の表出が目指されており、彼らのふるまいこそがペイリーパークを現代的な公共空間として成り立たせている。すなわち、使用者の私的活動を目的として庭園が手段のように使用されているのである。

近代以降ランドスケープ論に応用されたゲシュタルト心理学[21]の「地」と「図」の関係性は公共空間の空間分析にたびたび使用される。ゲシュタルト心理学の基本的な概念は、人間の知覚は対象物を部分の集合体ではなく、全体像として捉えるというものである。人間は、見方によって異なる図像に見える一枚の絵を目にした時、同時に複数の図像を認識できない。ルビンの壺の絵が有名であるが、片方を「図」として認識すると、それ以外の部分は「地」として背景に沈んでいく。ランドスケープ論ではこれを、元々存在した風景である「地」と、その上に新たに作られる建築や庭園などの構造物である「図」とすることが多い。近代から現代にかけてランドスケープは主に「地」であると認識されてきた[22]が、ポケットパークの乱立は、都市そのものを地として、点在する公園を図とする動きでもあった。都市内の公共空間が重視されるにしたがって「地」として認識されていた空間が「図」に変容してきたのである。

現代的な公共空間の評価では特に、ランドスケープ計画・創出・維持段階における市民参画、利用する主体の個人的活動をどこまで広げられるかという場としての可能性、人々の積極的な空間受容やコミュニケーションの自然発生が希求されるようになっている。中でも市民参画は公共空間創出の際の一つの基準でもあり、デザインから使用・維持段階まで様々なレベルが存在する。特に現代の公共空間作りにおいては、地域の課題解決や、住民が無意識にその土地に不可欠な共有財産と考えている風景をランドスケープ・アーキテクトが引き出し、再発見させるというプロセスが大事になっている。ペイリーパークでは使用・維持の段階において人々が無意識に風景を作る。そこでは座ったり食べたりといった人々の単純かつ私的な活動、つまり「地のふるまい」[23]によって人が人を呼び込み、パークの公共性や意義を規定・更新していく。

歴史的庭園の公共的位置付け

先述したように、ヘネラリーフェの新庭園は物理的に囲われていると同時に入場規定のある空間でもあるため、そ

こには二重の囲いが存在する。こうしたケースを含め「閉じた公共空間」は、近代以降のランドスケープ論ではどのように位置付けられるのだろうか。前章で考察した三点からアルハンブラ、そして歴史的庭園について検討する。

まず公私の距離にかんして、新庭園での人々のふるまいを確認したい。多くの観光客が庭園そのものを目的にアルハンブラを訪れるが、様々に設置されたベンチや石積みの縁に腰掛け、あるいは散策しつつ時間を過ごし、それぞれの目的に沿った活動をする人々も見受けられる。現在の新庭園は、公私の距離を縮めるという点ではポケットパークと同じベクトル上にあると言えよう。確かに歴史的庭園と公園の間には、所有団体や建造の動機、訪問者の目的などに大きな差異がある。しかし市民が私的利用のために歴史的庭園を使用する例は珍しくない。イタリアのボーボリ庭園やバルディーニ庭園などは、市民に無料で開放されるということもあり、家族で休日を過ごすために多くの人々が訪れる。新庭園やアルハンブラも、過去に各建設物としての機能を果たした後、徐々にそれ自身が目的地となり、そして現在では人々の私的利用のための場という役割を獲得しつつある。

次に「地」と「図」の関係性に目を転じると、新庭園は、元々果樹園があった場所に新たに庭園を造り上げたという点で、「地」を「図」へと転換させていることが分かる。丘の果樹園という「地」の風景の一部だった部分に新たなフォーカルポイントを作成し離宮と接続させ、その玄関口という機能を持たせることで「図」としての役割を獲得させたのである。アルハンブラにおいては特に庭園が重要な役割を果たしており、二〇世紀以降にも多くの庭園が生み出された。これはペイリーパークのように都市という「地」を下地として「図」を描きこむと言うよりも、一連の庭園を作ることでアルハンブラという「地」の中に「図」を増殖させる動きである。

最後に市民参画の観点から考えると、芸術体験、修復体験、集合的記憶の再現、生物多様性の把握、知識や教養の獲得など、特に近代以降に着目され始めた目的により、アルハンブラと能動的にかかわろうとする人々が増加している。アルハンブラ側もそうした新たなコンセプトを打ち立て、訪問客への間口をより広げようとしている。例えば現在アルハンブラ・ヘネラリーフェ財団が力を入れていることとして、体験型の教育プログラムやワークショップ、研究機関と協同した市民向けの研究発表の取り組みなどが挙げられる。観光目的の空間内では個人同士の関係性が重要となることはほとんどなく、あくまで個人と観光対象の結びつきにとどまっているが、こうした取り組みによって、

都市公園とはまた異なる人間のつながりが紡ぎ出される。アルハンブラの庭園において訪問者は本来、同じルールのもと、ほぼ同じルートを辿り、同じ風景を享受する。しかしそこでの彼らのふるまいや感情はわずかではあるがその場所の存在意義を変えていく。これまでは観光資源の享受に甘んじていた訪問客の目的は現在多彩になっている。人々は、「地」のふるまいだけでなく、自身が社会に積極的にかかわっていく「図のふるまい[24]」も行い始めているのである。

市民の私的活動を促進するために新しく生まれた都市公園であるペイリーパーク。そして存在意義の変化に沿って公共空間を修正してきた歴史的庭園のアルハンブラ。前者の主体は訪問者であり、後者の主体はあくまで庭園であるが、公園の公共空間としての第一義的機能が、訪問者の私的活動を目的として手段のように使用されることであるならば、歴史的庭園の現代的意味は何であろう。本来歴史的庭園には、都市の崩壊に対する都市空間の修復、共同体の集合的記憶のあり方、芸術作品との共生などの現代的問題が付随する。現在の取り組みの幾つかでは、それらを訪問者に考えさせる装置として庭園空間が利用されており、ここから歴史的庭園は、百科全書的な役割を担っていた過去の植物園のように、現代的な教育・啓蒙の機能を改めて担わされていると言うことができる。そしてその取り組みを通して、新たな存在意義と新たな人間関係創出の場としても期待されているのである。

結びにかえて

現代のランドスケープ観は、近現代に生まれた公共空間の増加とその意味の変遷を契機に導き出されてきた。それは、庭園が公園へと移行していった歴史的推移にともなう、ランドスケープ領域における価値観やコンセプトの変遷及び観光資源としての価値の顕在化にもかかわっている。公的権力に整備・管理されるようになった[25]ことによって、公共空間は都市計画事業に取り込まれたり、観光事業に組み込まれるようになった。一九世紀にセーヌ県知事G・オスマン（Georges-Eugène Haussmann, 1809–1891）によって行われたパリの都市整備事業や、同じく一九世紀にスペイ

ン王家によって所有されていたアルハンブラが観光の対象となっていったことからもそれは明らかである。新庭園は二〇世紀に造営された庭園ではあるが、一般の訪問客は、新しい公共空間の可能性を持つ庭園としてではなく、歴史的庭園の一部として機械的に認識してきた。それがこの庭園を不自由にしてきた原因であり、公園と区別されてきた点の一つである。しかしながら、公共空間の用途の多様化とランドスケープ論の変遷にともない、公園と歴史的庭園の共通点は必然的に多くなっている。「閉じた公共空間」としての歴史的庭園は観光の目的地としての役割を超え、社会的要請の変化にともなって視覚的にも概念的にも変容可能であり、新たな関係性を創出する空間になりつつある。

政治学者である斎藤純一によれば、「私的」とは他者の存在の欠如を表す[26]。逆説的に考えると、「公共的」とは他者なくしては生まれ得ないものということだ。公共空間とはまさに空間を媒体として他者との関係性を生み出す場のことであり、また互いに意識せず共有している場のことである。閉ざされた庭園空間であれ小公園であれ、訪問者は他者を風景の一部のように捉えつつ、互いの存在を許容し合っている。近年生み出された実験的な公園や歴史的庭園の新たな取り組みは、そうした関係性の拡張を模索しつつある。

現在ではニューヨークのハイラインやドイツのラントシャフツパーク・デュースブルク=ノルトのように、廃線や廃工場を使用した公共空間も一般に開放された公園として捉えられており、歴史的庭園と公園の間の曖昧な位置付けとなっている。こうした場がこれからますます増加することにより、公共空間の定義もさらに拡大するだろう。「閉じた公共空間」は存在目的の拡大とともに、実際に開放された空間として少しずつ開かれ始めている。人々の「ふるまいが風景となる[27]」のであれば、歴史的庭園においても人々が楽園としての庭園を共有しつつ主体的に活動することによって、新たなランドスケープを創出させることが可能となるのである。

佐藤紗良（さとう・さら）
日本学術振興会特別研究員PD（東京大学）。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。アルハンブラ宮殿の修復史を中心に、歴史的建造物及び庭園修復の諸問題を研究領域とする。

註

*1 芝奈穂「ヴィクトリア朝期イギリスにおける自治体公園の誕生 ―バーケンヘッド・パークの成立をとおして」『ヴィクトリア朝文化研究』七号（二〇〇九年一一月）五一―五二頁、及び、芝奈穂「十九世紀イギリスにおける初期公園の起源 ― Derby Arboretum（一八四〇）の成立過程を通して見る「植物園」から「公園」への変遷」『英文学研究』支部統合号三巻（二〇一一年一月）一四―一五、二三―二四頁。本稿において公園は「主に国や自治体が管理する、誰でも無料で、かつ自由に利用できる公共空間」と定義する。なお、現代のランドスケープ論で完全に一般開放された公共空間と位置付けられている公園でも、門やシャッターによって開園時間以外は閉じられているものもあり、「公共空間」という語が必ずしも、「誰もが常時無料で利用できる空間」のことを指しているわけではないという点には留意すべきであろう。

*2 公共性はドイツ語ではÖffentlichkeitと表現され、語源は「開かれている」という意味のoffenであるため一種の矛盾とも言えるが、現在では多種の曖昧な公共空間が発生していることを受けてこの名称とした。

*3 武田史朗、山崎亮、長濱伸貴編著『テキスト―ランドスケープデザインの歴史』（学芸出版社、二〇一〇年）六三頁。

*4 ランドスケープ・デザインとほぼ同義語として使用されるが、伝統的にはランドスケープ・アーキテクチュアが用いられることが多く、また専門職としてランドスケープ・アーキテクトと名乗るのが一般的となっている。造形的なデザインだけでなくコミュニティ・デザインなどのソフト面での仕組みづくりも含まれる。本稿ではランドスケープ・アーキテクチュア及びランドスケープ・アーキテクトで統一する。

*5 佐々木葉二ほか『ランドスケープの近代―建築・庭園・都市をつなぐデザイン思考』（鹿島出版会、二〇一〇年）一〇四頁。「オープンスペース」は主として非建ぺい空間に対して使用され、本稿でもその意味で使用する。

*6 小林頼子『庭園のコスモロジー―描かれたイメージと記憶』（青土社、二〇一四年）九頁。

*7 ジョン・ブルックス『楽園のデザイン―イスラムの庭園文化』神谷武夫訳（鹿島出版会、一九八九年）一九頁。ただし近年、必ずしも四分割された庭園を示すわけではないという分析も出てきている。例えば、フェアチャイルド・ラッグルズ『図説イスラーム庭園』桝屋友子監修、木村高子訳（原書房、二〇一二年）五〇頁。

*8 ラッグルズ、五三、五八頁。

*9 ブルックス、二三一、二三三頁。

*10 ガレット・エクボ『風景のデザイン』久保貞、上杉武夫、小林竑一訳（鹿島出版会、一九八六年）一五一頁。

*11 ブルックス、二六八頁。

*12 Francisco Prieto-Moreno, *Los Jardines de Granada* (Patronato Nacional de Museos, 1973), 176. 及び *Id., El Generalife y sus Jardines* (Editorial Everest, S. A., 1976), 46.

*13 *Id.*, 1976, 46.

*14 | José Tito Rojo and Manuel Casares Porcel, et al. *El Jardín Hispanomusulmán: Los Jardines de al-Andalus y su Herencia* (Universidad de Granada, 2011), 260.
*15 | Carlos Vílchez Vílchez, *El Generalife* (Proyecto Sur de Editiones S.A.L., 1991), 100.
*16 | Rafael Contreras, *Estudio Descriptivo de los Monumentos Árabes de Granada, Sevilla y Córdoba: ó sea la Alhambra, el Alcazar y la Gran Mezquita de Occidente* (s.n., Inprenta y Litografía de A.Rodero., 1878), 219.
*17 | 佐々木ほか、一〇四頁。
*18 | 同書、一〇四頁。
*19 | 同書、一一九—一二五頁。
*20 | 同書、一三〇—一三一頁。日本でも一九八〇年代からポケットパークが全国的に普及したが、その形態ありきで、コンセプトや目的が反映されていないように思われる。
*21 | 「ゲシュタルト心理学もまた我々の環境に対する考え方に関連をもっている」とエクボは述べている（エクボ、七八頁）。
*22 | 佐々木ほか、七七頁。
*23 | 長谷川浩己『風景にさわる—ランドスケープの思考法』（丸善出版、二〇一八年）四二頁。
*24 | 同書、四二頁。
*25 | 佐々木、一〇九頁。
*26 | 斎藤純一『公共性（思考のフロンティア）』（岩波書店、二〇〇〇年）「はじめに」九頁。
*27 | 長谷川、七四頁。

本論は一部JSPS科研費（JP19J01247）の助成を受けた研究です。

Photo by Marek Piwnicki